

Welfare

[ウェルフェア]

特集: 支援と記録

「サポート3」から「でんでん記録」へ

2015

56

CONTENTS

- P2 **くっきり! 福祉の未来形 ~日社済助成事業成果報告**
「第9回ワンダフル会(盲導犬使用者研修会)」
社会福祉法人 兵庫盲導犬協会
- P4 **くっきり! 福祉の未来形 ~日社済助成事業成果報告**
「こどもの不思議。すべてに理由がある。」
特定非営利活動法人 阿賀野児童福祉会
- P6 **特集 支援と記録**
「サポート3」から「でんでん記録」へ
- P10 **「空飛ぶ車いす」青少年の活動レポート**
アジアに届け! 空飛ぶ車いすプロジェクト in Sri Lanka
- P15 **福祉の共済コーナー**

● 助成事業成果報告

「第9回ワンダフル会（盲導犬使用者研修会）」

社会福祉法人 兵庫盲導犬協会

理事長 岸田 衛幸

一、はじめに

社会福祉法人・兵庫盲導犬協会では視覚障がい者の方々が「いつでもどこでも安全に自由一人で歩くことが出来る」環境の実現の為、盲導犬の育成・貸与事業を実施しています。盲導犬の繁殖・育成・訓練などの育成事業、盲導犬使用者への指導・フォローアップなどの盲導犬使用者のスキルアップ事業、盲導犬の受け入れが当たり前の社会を目指し、一般の方々への理解を深め、協力を求めていくための広報・啓発事業も行っています。

二、助成事業概要

盲導犬は貸与前の一定期間、視覚障がい者との共同訓練を行います。その際に習得した技術は、使用者の生活環境などで年月が経つにつれて変化が生じてしまいます。そのため当協会では、1年に一度盲導犬使用者に対して「ワ

ンダフル会」と称する集合研修会を実施し、少しずつ変化した技術を再度確認・調整していきます。同時に盲導犬の健康チェックも行っています。

この度は5月30日（金）に大型バスを貸切り、盲導犬を伴ったバス移動時に必要な技術（乗降や盲導犬の管理方法等）の習得を兵庫県淡路島までの日帰り研修の中で実施しました。懇親会では夏場の盲導犬への対策など盲導犬歩行、管理についての情報交換が行われました。

また、普段一人で参加するのは難しい物づくり体験を「お香づくり」を通して体験しました。



お香づくりの体験

三、事業の成果

難しい部分はガイド（手引き）がお手伝いをしながら、全員が完成させることができました。

例年、宿泊を伴った研修会として実施してきたワンダフル会ですが、今回は盲導犬使用者の負担軽減、また、遠方からも参加がしやすいよう日帰り研修として実施しました。本研修は、何気ない普段の行動をチェックし技術的なフォローアップをしてもらうことが難しい盲導犬使用者にとって、歩行指導員・訓練士による直接指導や助言が得られる貴重な機会となっています。

この度の研修は、盲導犬使用者の大型バスを利用した旅行における盲導犬管理技術の習得が主要な目的であり、当日は「バスの乗降」、「バス内での盲導犬待機の仕方」、「排泄のタイミングと場所」など細かい点での確認ができました。また、観光地である会場の淡路島パ



バスの乗降

ルシエ香りの館や淡路サービスエリア内での研修は、一般の方々が盲導犬使用者と盲導犬を間近に感じてもらい、理解を深めて頂けるよい機会となったと感じています。

当日、三宮のバスターミナルにて集合。多くの方に使用される長距離バス乗り場での狭い通路の歩行・待合いから始まり、最寄りの交通機関で帰路につかれるまで指導員は手引きボランティアを含む参加者全体の様子を確認し、必要があれば的確な指導を伝えることができ、参加者全員が良い学びの場となりました。また、手引きとして参加したボランティアならびに職員にとっても今回の研修では、視覚障がい者の介助を通して旅行で必要な手引き技術、バス利用時の手引き技術等の体得



バス内での待機

が可能になりました。

盲導犬使用者からは「遠方の使用者との意見交換・近況報告など出来てよかった」「体力的にも無理なプログラムではなかったので、とても良かった」、また手引きボランティアの方々からは「新しい気づきがありました」「今後の手引きで注意されたことが参考になりました」という声も聞かれました。



淡路サービスエリア内研修

四、成果の広報・公表

助成金の受託報告に関しては、当協会ホームページ（アドレスは下記参照）内において公表しております。また、当協会の広報紙『ワンダフル通信 第71号（2014年10月号）』において「第9回ワンダフル会」の記事を掲載する予定です。

HPアドレス

<http://www.moudouken.org/supporter.html>

五、今後の課題

今回の反省点や参加者の声を反映して研修内容の充実が図れるよう、研修場所・内容・日程の調整など協議を重ねていきたいです。また、使用者が「盲導犬との歩行を安全に楽しみながら行える」ような内容（香りや音、触感を楽しめるようなもの）を検討し、また研修の受容先となった場所での関係者や一般の方が盲導犬や視覚障がい者への理解者が深められるようなプログラムの充実も図っていく努力をしていきます。



淡路島での研修会

● 助成事業成果報告

「子どもの不思議。すべてに理由がある。」

特定非営利活動法人 阿賀野児童福祉会

理事長 荒木 朗

一、はじめに

平成24年5月に法人を設立し、平成25年度に、新潟県の委託事業として「児童虐待防止活動」を実施。その委託事業の内容を全県で行ってほしい旨の依頼があり、現在に至っております。

平成27年度から「子ども・子育て支援新制度」が施行されることより、地方公共団体から依頼を受け新制度の説明やアドバイスをを行っています。

二、助成事業概要

ここ数年、児童虐待防止活動について耳にする機会が多いですが、その多くは根本的な解決策ではなく、表面の対処法（児童虐待発見の啓発や相談会の開催など）にしか見えません。暴力にしてもネグレクトにしても「こうなった時にどうする」ではなく「こうならない」ために

どうするかが必要ではないだろうか。

虐待の一つの要因として「子供がわからない」「（親）の言うことを子どもがわからないのは当然であります。しかし、そんな大人（親）はそれがわからずに、「言うとおりに動かないから暴力をふるう」などの行動をとるといってはよく聞く事例であります。



それならば、子供を理解できれば虐待は無くなる（もしくは減る）との逆説が成り立つのではないだろうか。という理由をもとに保護者と保育関係者や教育関係者に対し子供を理解する講習会を実施することで、子供のことを少しでも理解してもらおう。それが児童虐待の削減につながるための全ての保育・全ての子供に関わる人の意識改革を目標とします。

三、事業の成果

今回の研修は当初50名の予定に対し、実際は35名と7割程度だったが、参加者からいただいたアンケートはどれも当法人への感謝の内容でありました。講師の予定が合わないことから内容を変更したことが逆に良かったです。

午前中の講演で子供に対しての接し方の大綱を聞き、午後の1コマ目で様々な県の園長から具体的手法を聞く。その上で最後にアトランダムに分けたグループで個人の体験や現状に合わせて思考する。参加した人たちだけが申請当初から目標とした保育や子供にかかわる人の意識改革は達成できました。

アンケートから

「褒めることの大切さや、保育士が子供に押し付けている部分があることを理解できた。先生方の話が素晴らしく心に響いた。また参加したい」(20代保育士)



「平岩先生の話しはとても良かったです。実践して役立っていききたいと思います。ワークシヨップではいろいろな見方・考え方・意見があり、とてもよい経験でした」(50代保育士)

「今回は職員2名での参加だったが、できれば保育園の職員全員で参加したい内容でした。次回はより多くの職員が参加できる曜日や時間を希望します」(30代保育園園長) など、年齢や職種に関係なく参加者のほとんどから次回開催の希望がありました。

四、成果の広報・公表

ホームページは現在制作中なので、すぐにアップすることはできませんが、今回の参加者から勉強会を開催したいので資料の提供と話の進め方のアドバイスをしてほしいとの連絡を受けました。映像の録画や音声の録音を認めることはできないので、OJTなどの勉強会の資料



として活用してもらったことが成果の広報となり公表につながることであります。

五、今後の課題

今後も様々な団体の力をお借りして、児童虐待防止活動を様々な形で行っていきます。今年から来年にかけては今回のように子供に視点を合わせて展開していきます。

それ以降は子供だけでなく、保護者に視点を合わせ、理屈はわかっているが感情を制御できない大人(特に母親)を如何にサポートするかという面も加えていきます。

報道では父親の虐待をよく耳にしますが、発生件数はDV被害者の母親が子供にあたるケースが全体の4割を超えている。つまり、父親母親のどちらかだけでなく両方を一緒に、家族をサポートすることが、今もこれからも求められる点を念頭に展開していきます。



「サポート3」から「でんでん記録」へ

手書きの記録作成と転記や検索に費やす時間を減らして、
もっと利用者の支援に時間をあてたい……。

相談支援ソフト開発者 ソーシャルワーカー（社会福祉士）

小川 弘子

**毎日の記録の入力は簡単に、
そして最大限に活用しなければ
もったいない！**

福祉の現場では、記録をつける時間がない。記録をつけるのもやっとで「支援第一、記録は二の次」となりがち。でも、「記録なくして支援なし」と言われるように、記録は「支援の要」です。だからこそ、おつくうがらずに記録をつけて、あまいな記憶ではなく確かな記録を基にサービスの質を高めて欲しい。「サポート3」は、そんな素朴なソーシャルワーカーの願いから開発された現場主義の記録作成・活用ソフトです。

本ソフトは、1999年に開発に着手、翌年には初代「ケース・サポート・システム」として誕生し、「サポート3 2012」まで、OS（基本ソフト）のバージョンアップに伴い、ソフトの仕様もユーザーの声を取り入れながらパワーアップして参りました（次ページの図をご参照ください）。開発には情報処理を学んだ重度な身体障害のある方に依頼しました。開発費を助成金で賄うために、いくつか助成金の申請をしましたが、ソフトの趣旨や特徴、必要性を理解して頂けたのは、当時の日本社会福祉弘済会様（以下、日社済様）だけでした。しかも日社済様には、福祉関係者向けの支援プログラム「日社済笑顔サポート計画」の一つとして本ソフトの開発と普及を位置付けて頂き、15年間の長きに亘って全面的なご厚意

の下に支えられてきました。

ところで、このソフトは開発の発起者である私と、日社済様そしてソフトウェア開発担当の民間技術者（サポート3以降の開発担当）の三者が連携して、開発とサポートを行ってきました。これから先も福祉の現場へ提供し続けていくためには、OSのバージョンアップとユーザーの声に応えたソフトのバージョンアップ、そしてきめ細かなユーザーサポートが欠かせません。しかしそれには、個人レベルの体制では難しく、しっかりとした基盤が必要でした。そこで、日社済様とも相談・検討を重ねた結果、2014年10月から、「テクノツール株式会社」様に、引き継いで頂く事が決まりました。

サポート3「2012」の後継ソフトとして、ソフト名を「でんでん記録」と改め、更にWindows 8.1/8対応ソフトの発売を始めました。勿論、これまでのサポート3ユーザーの皆様のサポートもいたします。

詳しくは、ホームページをご覧ください。
<http://www.rtools.co.jp/product/other/denden/index.htm>



「でんでん記録」開発ストーリー



永年、ご支援いただいた日本社会福祉弘済会の皆様感謝すると共に、テクノツール株式会社様には、これから先も利用者支援ソフトの開発とサポートをお願いいたします。また、福祉の現場で活躍されている皆様に「役立つソフト」を提供して参りますので、引き続きご支援、ご協力をまたご要望もお寄せ下さい！

支援の様子を記録から把握したい!



特定非営利法人 柿の木ネット 「柿の木カンパニー」
サービス管理責任者

中田 智子さん

支援の様子を記録から把握したい

今から2年前の2012年、サービス管理責任者として、事業を統括していく上で統一された記録で利用者への支援の様子を把握していくことが必要だと感じていました。それまでは、職員が個々に記録をつけていましたが、ばらつきも大きかったので把握しづらく、まとめるにも時間がかかっていました。若い職員は手書きよりもパソコンを使った方が早く、記録の時間も短くて済みます。また、紙ベースは記録の出し入れに時間がかかるなどの非効率性の改善が、使い始めたきっかけです。

支援の記録作成に特化した、手ごろな値段のソフトが欲しい

パソコンを使って、記録を「書ける」「並べ替える」「抽出する(取り出せる)」ソフトがあればいいなと思っていました。利用者の個人情報を書いた台帳は別にあるので、複雑な機能は要らない、支援の記録を書くことに特化したもので、しかも「手ごろな値段」のものが欲しかったのです。折しも、市内の障害者関係の福祉施設で既に「サポート3」を使っている所があったのを見せてもらい、使い勝手などを聞き、自分たちが欲しかったソフトに一番、近かったので使ってみることにしました。

種別：障害者就労継続支援B型事業 主たる対象：精神障害 利用者数：37名 職員数：7名
「わたしたちは、働く場から疎外されている人たちの希望につながるような活動を展開します」という法人理念のもと、1989年に保健師、家族会、市民有志が中心となって、立川市で最初の精神障害者共同作業所を開始。2006年にNPO法人格を取得し、2008年に「就労継続支援事業B型事業」へ移行。2012年には、柿の木カンパニーの分場「でくるしこ」を開設。主に清掃作業や「立川かりんとう」の販売など、その人に合ったサービス計画を立てて「病気と付き合いながら働く生活を支援しています」。

一人の利用者を複数の職員で支援した様子がよくわかる

サポート3を使ってみて良かったことは、記録をつけることに対する意識が高まり、記録を書くことが習慣化できました。具体的には、次の様なメリットが挙げられます。

- ① 同じ利用者に対して、複数の職員が記録を入力しているの、その方の室内の作業も屋外の作業の様子も把握できるようになり、一緒にいない職員も情報を共有できるようになった。
- ② 作業支援の他にも生活支援や相談支援も多く、特に相談の部分の検索がし易くなった。
- ③ 効率よくできるようになったので、時間的にも余裕ができてきた。

④ 外部のケース会議の際も、記録の読み込みをパソコン上で事前に行えることや、要点をまとめるときに役立っている。印刷した時のきれいさ、見やすさがとても良い。また、今後の改善点として「もっと直観的に操作ができるソフトになればと良い」と感じております。



長く使っているこのソフトは空気のようなもの!

社会福祉法人東京コロニー 東京都葛飾福祉工場
看護師

白木 薫さん

**パソコンで入力できるソフトができた
ことが、使い始めたきっかけに**

2000年当時、法人のケースワーカー・看護師会議でケース記録をパソコンで入力できるソフト（サポート3の前身「ケース・サポート・システム」）ができたことが報告されました。それまで手書きで記録していたのですが、身近にソフトがあったのですぐに使い始めました。葛飾福祉工場には、ケースワーカー（現在の生活支援員に相当）は配置されておらず、看護師が看護業務を主としながら、従業員（当時は利用者と言う概念はなかった）の相談も必要に応じて対応していました。今もこのスタイルは続いています。既に使い始めて15年近くになりますが、この間もずっとバージョンアップをしてきたこの記録のソフトを使い続けています。

**長く使っているソフトは
空気のようなもの**

毎日10名ぐらいの方々の記録をつけ、それを印刷して業務日誌として上司へ報告しています。また、ケース会議の時に情報提供を行ったり、過去に働いていた人の問合せにもこのソフトを使って容易に対応することもできました。印刷し

種別…多機能型事業所（障害者就労継続支援B型・就労移行・就労継続支援A型）
東京都葛飾福祉工場は、1972年（昭和47年）、障害のある人の職業対策の一環として東京都により開設された、国内初の身体障害者福祉工場です。開設から40数年、防災・避難用品の製造販売、縫製、封筒印刷等の事業を通じ、一貫して障害のある人の社会的・経済的自立を担ってきました。2012年には東京都からの民間移譲と障害者自立支援法（現・障害者総合支援法）の施行により、法人立の多機能型障害福祉サービス事業所に移行し、より多様な事業運営と地域に密着したサービスの拡充に努めています。

た記録は鍵のかかる書棚に保管していますが、情報を取り出すたびに、毎回、鍵を開けて探すことは時間がかかるのですが、パソコンにある情報は、殆ど時間をかけずに取り出すことができるので効率的です。（但し、セキュリティに配慮した対応はしています。）

**バイタルサインをグラフ化できるよう
に項目を増やしてほしい**

長く使っているの、空気のような存在になっています。特に要望と言うのはないのですが、如果说、看護師ということもあって、バイタルサイン（体温、血圧、脈拍等）をグラフ化するために、支援記録を入力するところに、バイタルサインの項目があると嬉しいのですが、今のソフトはできないので、このようなことができることを期待しています。



桜の頃の葛飾福祉工場

アジアに届け！ 空飛ぶ車いすプロジェクト in Sri Lanka

参加者

神奈川工科大学 車いす修理屋「KWR」	梅原 直人	島野 克弥	高梨 裕光	池田 拓海	川満 太一郎
新潟医療福祉大学 義肢装具自立支援学科 「FWS」	上口 春菜	池田 愛	大村 夏純	井上 捷太	山口 泰平
	中野 雅之	栗栖 亜美	石川 由佳子	天井 仁美	柴田 恭介
韓国チーム	KIM YOU JN	KIM JIN SEOP	PARK JANG HYUN	KIM YOUNG SUL	

(敬称略・順不同)

日程

2014年

8月17日 10時：成田空港にて日本メンバー集合

9時間のフライト、2時間半の現地バス移動を経て、ホテルに到着

22時：ホテルにて韓国からの参加メンバーと合流し、夜中までミーティング

8月18日 終日：リッチモンド・キャッスルにて、現地の子供達と一緒に車いすの点検・修理



8月19日 午前：リッチモンド・キャッスルにて車いすの寄贈式後、カルタラ国立病院へ

17時：カルタラ国立病院にて車いすの寄贈式

8月20日 12時：障害者施設(SAMBODHI HOME VADDEGAMA)にて車いす寄贈・シーティング

14時：ヒッカドゥアのお寺にて車いす寄贈・シーティング

23時：スリランカのコロンボ空港から、帰路につく



今回はKWR(神奈川工科大学)、FWS(新潟医療福祉大学)の皆さんのレポートをお届けします。学生たちの素晴らしい活動内容にぜひご注目ください。日社済ではこれからも空飛ぶ車いす活動を支援していきます。

空飛ぶ車いすプロジェクト・スリランカ

KWR修理屋

・プロジェクトに見る背景

空飛ぶ車いすプロジェクトでは、これまでに25カ国・4000人以上の人々に車いすを寄贈してきました。また、様々な国を訪問し、現地での修理活動も行ってきました。その際、東南アジアの多くの国では車いすの製造台数自体が少ないために車いすが高価になってしまい、入手が困難となっている現状があります。それに加え、車いすを利用するための設備、故障した際の修理技術、利用者の車いすの扱い方等の「車いすを扱う環境」が整っていない事も車いすの普及を妨げているという事が判りました。そこで、ただ単に車いすを寄贈するだけではなく、現地でより車いすに関する認識を深め、扱い方等の知識と修理技術の普及を促す必要もあると判断しました。KWR修理屋は、「空飛ぶ車いすプロジェクト・スリランカ」に参加して、車いすの修理を行い、車いすをより身近な物とする事を目標としました。

・フィッティング知識の伝達・車いす適合

スリランカでは車いすを使ったことのない人が大勢います。そのような人達にも車いすの正しいフィッティング知識を身につけてもらい、間違った車いすの使い方による骨の変形などの生活に支

障をきたすような副作用を防止するために必要な知識を実際に体験しながら覚えてもらう、いわゆる「車いす適合」も、前回からFWSが中心になり実施してきましたが、今回も重要な目標に設定しました。

・今後の展開

修理や適合など経験を積みデータを集め、今後諸外国で活動する際、どのような車いすを求めているのか、患者の症状の割合など、適合の参考になるようにしたいと考えています。従来の活動では、車いすの修理と寄贈のみを目的としていましたが、適合までを目的としたことで今後のプロジェクト活動の目的を大きく変えることができました。

私達が実際に車いすの適合を行うことで、利用者の今後の生活に支障をきたすような新たな病気を防止することができます。これにより、ただ単に車いすを寄贈するよりも、さらに意味のある「寄贈」ができるのではないかと考えました。

今後も利用者の属性と車いすの種類データを収集し、諸外国での活動において、現地で必要とされている車いすの種類や属性を認識することができます。

まだまだ、アジアもしくは世界では車いすを必要とする人がいる。私達が実際に現地へ赴き、直接利用者の車いすを適合することで、その方の生活を少しでもサポートすることが出来るのではと考えています。

昨年に続く海外ボランティア

FWS 井上 捷太

今年も、夏の海外ボランティアに参加、3泊4日のスリランカへの旅でした。今年は「現地の人々とのコミュニケーションを多く」という目標と



子供たちとは英語で会話することができました

「シーティングをより良くしたい」という目標を掲げました。全体的に振り返ると昨年より流れは良くありませんでしたが、その自分たちで考えて行動することができ、少しは成長できたと思いますが、一方まだまだ課題は多いと思います。今回は将来の自分のビジョンをよく考えることのできるよい機会でした。その為には今後はシーティング、人体の知識や語学勉強により力を加えて、より多くの人の笑顔を見ることができるよう頑張っていきたいと考えています。

身に染みだ言葉の大切さ

FWS 山口 泰平

この写真は現地の子供と一緒に修理をしている様子です。子供の名前はイスルと言います。彼はとてもまじめで素直な子です。車椅子や車輪の仕組み、清掃方法を教えると、彼は周りの子供たちを集めて、教え始めました。掃除の手順を教えると、どんどん覚え、分からない時は私にすかさず聞きます。殆どの事はジェスチャーや簡単な英語で教える事ができましたが、車輪軸の丁度いい調節具合を教える時「きつすぎず、ガタガタしない丁度いい占め加減」を教えることができなかった事が私の中の心残りです。もし自分の会話力がもっと強ければ教えることができたと思います。また事前準備もできた筈です。海外活動には必ず自分自身が思わないような壁が多く、また得

るものも多くあります。その為、今回も多方面からの収穫が沢山あったので、行かなかった人たちに教えたいと思います。



イスルと一緒に修理

この一枚を見て思い出すこと

FWS 栗栖 亜実

私はこの時、次々に変化する予定に頭を追いつかせ、声が震えるのを必死で抑えて、みんなを引っ張らなくちゃとそればかり考えていました。適合が始まり、私は全体を見て、指示やみんなのサポート役になるはずでした。でも現地の方に適合をして欲しいと言われ私しかいなかったなので私が適合をし、終わったと思ったらまたすぐ他の人に捕まり……、その連続でした。その時の適合者数

は全体の3分の1も満たされているのかという状況だったと思います。閉会式が始まるので適合をやめる様、言って回りました。「え、もう？ まだ終われない！」という表情でした。

今回の想定外の範囲外の事態を少しでも予想できていたら、もっと準備していればと自分の詰めの甘さに嫌気がさします。一緒に頑張ってくれた仲間、身体にあつていない車いすのまま帰ってしまった方々一人一人に謝りたいです。唯一の救いはチャレンジしたことを全力でこなそうと挑んでいたことです。臨機応変に対応できなくて結果は出なかったけれど頑張っていたと、心から思えます。でも本当に結果を出したかった！！この一枚で色んな思いが一気に思い出されます。



この一枚を見て思い出すこと

すべてが2倍、3倍

FWS 柴田 恭介

初めての海外活動となりました。「Thank you!」シーティングが終わるとどの利用者さんもこの言葉をかけてくださいました。普段いろいろな場面で感謝の言葉をもらっていますが、この時の言葉ほど鳥肌が立ち感動した言葉はありません。私たちが行ったシーティングは利用者さんに合う車いすを選び、フットサポートの高さを合わせ、必要であればクッションを入れるという作業のみです。このシーティングを行うために、私たちは勉強の合間を縫って事前学習をしていました。しかし、実際にシーティングの経験があるわけでもなく、まだまだ学ぶべきところも多くあった私たちは、当然のことながらプロがやっているそれとは質もはるかに劣り、ちゃんと合う車いすを提供できる自信はありません。現地では車いす自体が貴重なため、僕たちが車いすを渡すと本当に嬉しそうでした。自分たちのできる限りのことは全てやりつくしてきたつもりですが、利用者さんの笑顔を見ると悔しさと達成感や喜びが同時に生まれてきました。とても複雑な気持ちだったのを今でも鮮明に覚えています。今回の活動では、準備の段階から本当に深く考えて行ってきました。それ故、喜びや悔しさも倍でしたが、どちらも今後夢を追いつけるためのいい材料になりました。このプロジェクトは大学卒業後も関わって

いきたいと考えていますし、少しでも多くの人に知ってもらえたらと思います。

初の海外活動を通して

FWS 大村 夏純

初めての海外活動であり、初めての学外活動でした。時間の限られた中で患者さんに合う車いすを選び、さらに車いすの適合を行うということはとても大変なことでしたが、患者さんに喜んでもらえるように車いすを選び適合することを、とても嬉しく思いました。予期せぬ出来事が起こり、十分にシーティングの時間を設けることができず、悔しい思いもしました。

このように私たちの中では反省点が多くありましたが、車いすを受け取った患者さんは最後に笑顔で嬉しそうにしてもらったので、自分も嬉しくなり、この活動をしてよかったと思えました。決められた時間の中でやらなければならぬことが沢山あり、戸惑ってばかりで周りに迷惑ばかりかけたかもしれないですが、そんな私にアドバ



嬉しそうな利用者さん

イスをくれたり、支えてくれたりと仲間の力をたくさん借りて今回の活動を終えることができました。今回の活動で、スリランカの多くの患者さんに車いすを届けることができ、この活動に参加できたことを嬉しく思います。これからは、今回のこの活動を活かしてより一層サークル活動に力を注ぎ、また空飛ぶ車いすプロジェクトに参加できれば良いと思っています。

スリランカで気になったこと

FWS 池田 愛

最終日、車いすを受け取りに来ていた方の一人が、車いすでお寺まで来ていました。その方の車いすが、日本製の車いすとは作りが違うことがとても気になりました。

全体の形状はスポーツ用車いすに近いのですが、キャスターが普通の自走用車いすや介助用車いすは大車輪の前に2つずつ着いているのにこの車いすはフットサポートの中央から伸びた棒の先一か所だけに着いていました。スポーツ用車いす



スリランカで見た車いす

などは後ろに転倒防止用としてキャストが着いているものもありますが、このように前にキャストがつか所しか着いていないようなものは初めて見ました。このようなつくりだと、直進の際には問題ないように見えますが、左右に方向転換する際にキャストが前の方に突き出ているので方向転換しづらいと思われました。残念ながら使用者の方に聞くことはできなかったのですが、これがスリランカ製なのか他国製なのかはわかりませんが、普段私達が修理する車いすに比べ、とても頑丈に作られていたように見えました。

準備してきたことと現実

FWS 中野 雅之

3日目のお寺や障害者施設訪問の時には、クッションを車いすにつけ、利用者の方と話すことが出来ました。一方、クッションの設置方法を正しく教えることが出来なかった等、多くの課題が見つかりましたが、初めてこのクッションを喜んでもらった気がしました。自分の手をとって笑顔で話しかけてくれる姿は今でも忘れられず、今まで苦労してきたことなど吹き飛ばすくらいの笑顔でありました。

今回は私にとって2回目の海外活動でありFWSとして初めて適合用にクッションを持っていく取り組みをしましたが、新しい事をした結果、課題が去年よりも多く残った活動となりました。

た。しかし昨年の活動に比べると成長を実感することが出来ました。利用者の方とコミュニケーションを積極的にとることが出来たり、反省点を活かして次に繋げることが出来たりなどプロジェクトメンバーで成長を確認することが出来たと私は思います。この活動は多くのことを学ぶことが出来るボランティアをする側の私達を成長させてくれる。そんなこのプロジェクトに恩返し出来るくらいに活躍し、車いすを通してこれからも自分を高め、届けていける様に精進していきたいと思えます。



利用者の方と会話ができました

車いすを通して私たちに今できること

FWS 天井 仁美

今回で2回目となる海外活動の参加を決意した時から昨年の反省がどれだけ活かせるだろうかという不安と、今年は現地ですんなりできるのかという大きな期待があった。活動を通してFWSには少しずつ成長がみられている。この成

長が活動の発展を築いていくことを常に意識し、日々、サークルに参加していきたいと感じる。また多くの方にこの活動を知っていただき、世界の社会福祉に目を向けていただきたい。世界の社会福祉が潤わなければこの活動に終わりはない。これからも我々ができることは何か。精一杯見つけて、行動をしていきたい。この写真は車いすを贈呈する前の利用者さん達である。車いすを初めて見る人が多いことだろう。そして車いすをもらえるという嬉しい気持ちを持つ人が多いと思う。しかし全ての人が嬉しい気持ちで待っているわけではない。1台の車いすをもらうために、何時間もかけて来る人がいる。そんな大変な思いをして受けとる方々が多くいることは、我々の大きな課題の一つを物語っている。



寄贈式会場で車いすを待つ利用者

ジブラルタ生命は、福祉施設等でのボランティア活動をおこなっています!

10月の第一土曜日に、ブルデンシャル・ファイナンシャル・グループの社員が一同にボランティアに取り組む「グローバル・ボランティア・デー」が開催され、ジブラルタ生命では約14,000人の社員とその家族が参加し、施設でのボランティアや清掃活動などを行いました。今回は、同社で行われたその活動の一部をご紹介します。

福祉施設の掃除や補修サポート (金沢支社・金沢第一営業所)

10月4日(土)、金沢第一・金沢第二・金沢第三・金沢第四営業所および小松営業所は合同で50名の社員が、社会福祉法人 佛子園シェア金沢で溝にたまった落葉の清掃や庭の除草、施設の建物のペンキ塗り、カーテンの補修サポート等を行いました。

今年が初めての取り組みでしたが、ボランティア活動を通して、福祉施設のリアルな状況を肌で感じる事ができたと思います。また、お互いに協力し合うことで大きな力となり、このようなサポートもできると実感しました。施設の方々からのボランティア自体の感謝に加え、

今後のボランティアサポートの広がりも期待でき、大変感謝している旨のお言葉をいただきました。



慣れないペンキ塗りでしたが、一生懸命に挑戦しました!

バリアフリーマップ作成のために街歩き調査 (本社)

コンプライアンスグループを中心に約80名の社員が、赤坂見附近郊を車椅子で周りながら、バリアフリーの状況を調査して、バリアフリーマップを作成する活動に参加しました。当日、朝9時にタワーに集合。バリアフリー調査の仕方についてオリエンテーションを受け、6人ほどのグループに分かれて、いよいよジブラル



専用の機器で傾斜を確認

タ生命の本社ビル(ブルデンシャルタワー)を出発。赤坂の街やコンビニなどのお店の中に入り、専用の器具を使って傾斜、段差を具体的に調

べて回りました。普段は全く気づかない道の段差や傾斜も、自分で車椅子に乗ってみると、感っていた以上に大変なことがわかりました。「歩いていると全く気づかなかったけど、こんなに傾斜していたんだ」「このトイレ、車椅子用なのに使いにくい」というように、車椅子で移動する人の気持ちを理解する上でも貴重な経験ができた、という感想が寄せられました。



佐藤社長も車椅子に乗ってタワーを出発!

ジブラルタ生命では、「グローバル・ボランティア・デー」を始め、様々な社会貢献活動に取り組んでいます。「公益財団法人 日本社会福祉弘済会」の社会貢献活動の一つである、「書き損じはがき収集ボランティア活動」についても、当社はその趣旨に賛同し、多くの社員が取り組んでおり、2014年度は584,000円を寄付させていただきました。

コールセンター
0120-37-2269

受付時間 平日8:30~20:00 土曜9:00~17:00
(日曜・祝日・12/31~1/3を除く)

ホームページ
<http://www.gib-life.co.jp>



Gibraltar
ジブラルタ生命

「公益財団法人 日本社会福祉弘済会」はジブラルタ生命と提携し「福祉の共済」を推進しています。



くっきり! 福祉の未来形

ニッ シャ サイ 日社済の 主な事業



社会福祉助成事業

公募による社会福祉関係者の研修・研究事業等への助成を行っています。



介護福祉士資格取得支援事業

福祉最前線で働きながら資格取得を目指す方々への支援のために、模擬問題・過去問題解説集を提供しています。また、提携先県社会福祉協議会の受験対策講座への助成も行っています。



アジア福祉助成事業

全国社会福祉協議会と連携した福祉の国際協力パートナーの養成と、その活動の支援・助成を行っています。



空飛ぶ車いす支援事業

アジア等の障害をもつ方々への車いす修繕・寄贈を支援しています。



社会福祉関係者の共済に関わる事業

福祉関係者の福利向上のために提携会社を通じて団体扱生命保険を提供しています。

